

特集2 2024年 第15回 高校生の 建築甲子園



テーマ

地域の暮らし — まちに住む・地域に開く戸建の住まい

主催 公益社団法人 日本建築士会連合会
都道府県建築士会

後援 公益社団法人 全国工業高等学校長協会
国土交通省、一般社団法人 日本建築学会

協賛企業 株式会社総合資格(総合資格学院)
ステッドラー日本株式会社

建築甲子園全国選手権大会 審査委員会
審査委員長 堀 啓二(共立女子大学 学長)

審査委員 田中隆司(教育・事業本委員会委員長)
吉田浩司(青年委員会委員長)
石貫方子(女性委員会委員長)
清水耕一郎(まちづくり委員会委員長)

総評 古谷誠章 | (公社)日本建築士会連合会 会長

建築甲子園を主催する日本建築士会連合会会長の古谷誠章です。2024年の建築甲子園に参加してくれた皆さん、大変熱意あふれる多くの作品を応募していただき本当にありがとうございます。

本来ならこの講評を執筆されるはずであった、審査委員長を務められた堀啓二先生が最終審査を終えた直後に急逝されたと聞き、とても悲しく、大変驚いています。改めて堀先生のご冥福をお祈りしたいと思います。本当に先生の穏やかで優しさに満ちたお人柄が偲べれます。今後は先生から薫陶を得た皆さんが、大いにその教えに従い、そしてまた大いに広い世界に羽ばたいていかれることを祈念しています。

皆さんの作品を拝見して、それぞれに現代の私たちが直面するさまざまな社会的な問題に真摯に取り組み、また指導にあたられた先生方も熱心な議論が交わされた様子が窺われました。いずれも私たちの身の回りの身近なところにあるさまざまな暮らしのシーンやその他の場がいかなるものであったら良いのかについて、大袈裟でなく人々の身体スケールに合った好ましい提案が多いと感じました。おそらくそれは皆さんの日頃の建築の学びの中で、自らの身体感覚に根差した空間を実感する機会を大切に、築かれてきたものの表れだと思います。

そんな中、見事に最優秀となられた群馬県立桐生工業高等学校の作品「ハレもケの日も祇園屋台」はコミュニティの祭事に重要な役割を演じる屋台を、日常的にも身近に感じ、屋台を格納する施設自体を非飛地の交友の場としようとする提案で、ハレの日のみならずケの日の様子についてもいきいきとにぎやかに表現されていて、実物を見たことのない私にもその楽しさが伝わってきました。また、提案された施設のデザインもそれ自体が大変魅力的なものです。さらにそれを表現する表現力もとても高いと感じました。

「建築甲子園」は一種の他流試合と言えるわけですが、日頃席を並べる同窓の友人たちとの競争ではなく、姿の見えないライバルとの戦いは、勝負を超えた新たな価値観と出会い、想像を超えた世界の広がりを感じる絶好の機会です。慣れ親しんだ仲間たちとともに、大いに船出をしてさまざまな挑戦の機会に乗り出してほしいと思います。自らの目を未来に向けて大いに開きましょう。

好きこそものの上手なれ、とはよく言ったもので、こうした挑戦を好きだと感じられる皆さんは、今後の調整において必ずや栄誉を獲得されると確信しています。私も挑戦好きの一人です、皆さんも大いに頑張ってください。